

消防科学総合センターは、広々と緑したたる三鷹消防キャンパスの中、アカデミックな雰囲気のにじみ出る施設であり、そこで建築、情報、地域環境、火災原因調査の専門家たちが熱心に研究と業務にたずさわっている。

同センターは、10年ほど前「消防科学情報研究センター」として発足、汎用コンピュータを導入して、消防統計、アンケート調査等の情報処理と消防防災関係の情報システム、消防力最適配置システム、防災アセスメント等の調査研究、関係資料の収集、刊行などの事業を実施、その後「消防科学総合センター」として再発足、あわせて消防研究事業も行うこととなり、最近「救急基金」も設立された。

センターの運営は、資金や人員等の制約にもかかわらず、消防庁やセンター内外の関係者の尽力によって、逐年事業を拡げ、すぐれた実績を残している。

わが国は、エレクトロニクスやハイテクノロジーでは世界一、二を競っているが、今後も科学技術の発展は一層顕著なものがあるだろう。消防防災の分野でも、技術革新と情報化は一段と進展すると思われる。

このような時代にあって、消防科学総合

センターの情報センター、シンクタンクとしての役割は重要性を高め、関係機関、関係者の期待は大きなものがあると思う。

情報センター機能の強化には、高性能のハードウェアを導入、新しいニーズを把握して、データを収集整理し、解析利用等のシステムを開発することがぜひ必要であり、またニューメディア時代における消防機関諸業務の質の向上と経費節減のため、OAや情報ネットワーク等についての検討も求められるであろう。

シンクタンク機能の拡充には、情報化社会の消防防災行政の進展に資するため、とりわけ情報分野における、火災や各種災害の予防、応急対策等に関する調査研究やシステム開発が、広く、深く、先駆的に実施されることが望まれる。

消防科学総合センターにとって、今後これらを含め幾多の課題があろうが、情熱をもって、取り組んでほしいと思う。また、地方団体、消防機関との連繫を深め、学者、研究者、専門家との提携も強め、財政的基盤を固めていくこと

が大切だと考える。

センターは、これまで、芽を伸ばし、根を張ってきた。これからは、枝をひろげ、葉を茂らせる時代である。

随 想

枝ひろげ、葉を茂らせて

高 品 宏 作

（助）消防科学総合センター
危険物保安技術協会理事
五代目理事長